

海渡 英祐（かいと・えいすけ）

1、プロフィール

江戸川乱歩賞受賞作家で、歴史推理ものを中心にすぐれた本格ミステリーを書く。

<生没>

1934(昭和9)年9月24日 ~

<代表作>

『伯林－1888年』『極東特派員』『影の座標』『積木の壁』『咸臨丸風雲録』『出囃子が死を招く』

<青森との関わり>

昭和20年から8年間を青森市で過ごす。青森高校出身。高木彬光に師事する。

2、作家解説

本名は広江純一で、昭和9年東京生まれ。少年時代を満州で過ごし、終戦の翌年日本へ帰り青森市に住んだ。青森高校から東大へ進学する。

昭和33年に東大法学部を卒業したが、高木彬光が『成吉思汗の秘密』を執筆した際、アルバイトで資料収集や原稿の整理を手伝ったこともあって、普通の会社勤めをする気になれず、みずからが推理作家になる覚悟を決めた。“海渡英祐”のペンネームも、成吉思汗＝源義経(海を渡った英雄)にちなんで付けた。

作家としてのデビューは『極東特派員』や『爆風圏』等のスパイ小説からだが、当初さしたる評価は受けず、是が非でも傑作を書く必要に迫られていた。江戸川乱歩賞への応募を思い立ったのは、そうした気持ちのあらわれである。

昭和42年、森鷗外の遺した資料に基づいて、その空白部分に事件を設定し、ビスマルクや北里柴三郎、それに若き日の森林太郎など実在の人物を登場させ、恋愛と密室殺人事件を結びつけた『伯林－1888年』で、江戸川乱歩賞を受賞す

る。そのユニークさにおいて、歴代受賞作の中でも1、2を争う秀作と折り紙がつけられた。

受賞後は主として本格推理小説を書くが、『咸臨丸風雲録』のような歴史推理、『無印の本命』のような競馬推理、『おかしな死体(ホトケ)ども』のようなユーモア・ミステリーも手がけている。

3、資料紹介

○『伯林－1888年』

図書

1967(昭和42)年8月

194mm×133mm

森鷗外の文献を渉猟して、ドイツ留学時代の鷗外を主人公に、その空白部分に事件を設定し、ビスマルクや北里柴三郎など実在の人物を登場させ、その青春の慕情と事件の推理を描いた作品。第13回江戸川乱歩賞受賞。